G.オブザーバーとして

田村　直樹

１．はじめに

筆者は神戸大学大学院でマーケティングを専攻する院生である。自分の論文での方法論をエスノメソドロジーに依拠し、研究を進めてきた。縁あって、徳島大学の樫田研究室に共同研究者として参加させていただくことになった。関西では（おそらく西日本)、エスノメソドロジーの講義が殆どなく、頭を悩ませていただが、樫田研究室との出会いのおかげで、社会学、エスノメソドロジーについての理解が深まった。

ゼミでは、単にテキストを輪読するということに限らず、フィールドに出て、インタビューやビデオ撮影といった調査方法を身につけるということが主眼におかれている。

筆者が参加したのは 2004 年 10 月からの後期であるが、この約 4 ヶ月を振り返りつつ、オブザーバーとして参加した感想等をこの紙面をお借りして、述べさせていただくことになった。

２．講義について

後期の講義では、テキストとして上野直樹（1999)『仕事の中での学習』東京大学出版会を使用した。学部生にとっては、かなり高度な学術書にもかかわらず、樫田ゼミのメンバーは、丁寧にレジメを作り毎週の議論に参加されていることに、驚きと頼もしさを感じた。

上野（1999）は、道具と人とのインタラクションを扱っているものだ。ゼミメンバーは、それぞれの問題関心に沿って、テキストを読みこなし、自分のインタビューデータと参照しながら研究を進めていった。こうした、テキストのみに頼るのではなく、フィールド調査の結果と参照しながら理解を深めていくという方針に、感心させられた。

そうしているうちに、自分でもフィールド調査がしたいと思うようになった。そして、幸運なことにその機会を 12 月 15 日に得ることになったのである。

３．調査実習について

2004 年 12 月 15 日、筆者は樫田研究室のメンバーとともに、Z 園における現地調査に参加させていただいた。筆者以外のメンバーは夏にも調査を経験しており、その手際の良さに心強く思った。カメラの扱い、カメラ設置場所の配慮、ビデオテープが混乱しないようにインデックスをこまめに記入等、といった一連の作業がチームワークよく進められた。

そしてメンバーは、自分たちの調査に協力してもらっている方々ととてもフレンドリーに接しており、その光景が自分にとって新鮮なものであった。撮影は、調査対象者をカメラで延々と追いかけていくというものだ。これまでの筆者の考えであれば、このようにカメラが追尾するということに、恐らく調査者は困惑するのではないか、と。しかしながら、この撮影現場は筆者が考えているようなものではなかった。Z 園の方々と樫田研究室のメンバーとの、いわゆる信頼関係を見たように思う。

撮影後、メンバーは、調査に協力いただいた方々にお礼を申し上げ、再度手際よく機材を片付けて研究室に戻った。実はこれからが、メンバーにとって力仕事になるのだ。収集した貴重なデータをパソコンで管理し、画像データをメンバーで共有しつつ、報告書を仕

上げねばならないのである。

４．データセッション

2005 年 1 月 7 日、8 日はゼミ旅行となった。場所は小豆島。筆者もそれに参加させて頂くことになった。その 7 日というのが、メンバーが撮影したデータをどのように報告書で扱うかを議論する、データセッションとなった。

それぞれのメンバーのテーマに関する画像データを、全員で議論するというものである。こうしたデータセッションというのも、筆者にとって初めての経験であった。

画像データという情報の、その多さに驚かされた。ビデオを利用することによって、何度も繰り返し再生できるので、ほんの数秒の出来事の中に膨大な情報を入手できるのである。メンバーは、そうした数秒の出来事の中から貴重な情報を議論していくのである。撮影時には、調査者も気づかなかった、ほんの些細な被調査者の言動を捉えることができる。

そうした一瞬の相互行為を見逃さず、それを研究していくという緻密さ、それはエスノメソドロジーが持つ特徴の一つであることを実感させられた。

５．ゼミ旅行

データセッションの翌日は、小豆島観光が待っていた。小豆島のユニークさを再発見できたとともに、メンバー間の絆がいっそう深まったように思う。ゼミ旅行幹事の正島さんの観光計画は絶妙で、どこにいっても楽しさを満喫できるというものであった。

世界一距離の短い海峡に困惑し（これでもギネス？）、サルが放し飼いにされている自然公園で驚き（サルが足元にいっぱい）、ケーブル山頂から魔よけの小皿を渓谷に投げる快感、讃岐うどんを楽しみ（歯ごたえがいい）、二十四の瞳記念館で小豆島の自然と日本の時代性に思いをはせ、オリーブ館でお土産を買う等。筆者にとって、本当に忘れられない思い出となった。

６．おわりに

最後にこの場をお借りして、謝辞を述べさせていただこうと思う。樫田先生には、エスノメソドロジーだけに関わらず、社会学について広くご教授いただいた。そして調査実習でお世話になった、正島さん、林さん、佐々木さん、原田さん、田中さん。卒論ゼミの吉野さん中本さんには筆者の研究に貴重なコメントを頂いた。樫田研究室の瀬尾さんには各種事務手続きをしていただいた。

筆者の研究人生のなかで、忘れることのできない貴重な 4 ヶ月であったということを述べて、締めくくることにしたい。